

シャンパンを飲む）泣いたつて初まらねえ、い、娘になつて泣かないことさ」  
 おつる（顔に白粉を塗る）「バリーへ行つたら手紙を下さい、私本當にあんたが好きなのよ、よう彌吉さん、私本當にお前さんが好きなんだよ」

彌吉「ヤッ誰か来たぞ」

鼻唄を唄ひ乍荷物をいじる。夫人。嘉平治。愛子。岩野出で来る。

嘉平治「出掛け様、そろ／＼時間だ」

龍子夫人「もう十分で馬車に乗らなければならぬ（部屋を見廻し）左様なら、私懐しい古い家、左様なら、御先祖様、冬が過ぎて春が来るとお前はなくなつてしまふみんな来てこはしてしまふのだよ。（愛子に熱いキスをして）私の寶石よ、貴方はキラ／＼光つて、お前の目はダイヤのやうよ、お前さんうれしいの、わ、そんなに嬉しいの」

愛子「え、嬉しいわ。だつて母様、私達は新しい生活が始まるんですもの」

嘉平治（元氣らしく）「この子の云ふ通りさ、万事またすつかり好くなる、櫻の園の賣

れるまでは、私達は皆な情けなさうな顔をしてゐた。だが一まはり、斯うと極まつて、どうにもならないとあれば却つてみんな落付いて元氣にもなるよ、わしもこれからは銀行の書記さんだ、もう一廉の實業家だよ、赤玉は真中だ。龍子、お前だつて、何のかんのといふものゝ、だん／＼顔色がよくなつたことは争へない」

龍子夫人「え、神経も鎮まりましたわ。確にさうよ。（手傳つてもらつて帽子をかぶり外套を着たりする）彌吉、私の荷物を持つておくれ、もう出かけるのだから、（愛子に）私達は又直に逢ひませうねえ……私巴里へ行きます。ヤロスラーウの大をばさんから、地所を買つてよこしなすつたお金があるからね。當分あれで暮らすつもりだよ」

愛子「母様、もう直きに歸つて来て下さいな、私勉強して女學校の卒業試験に及第し早く職業を見つけてお手助ひをしますわ、ね、二人でいろいろの本を讀みませうね、（母の手に接吻して）長い秋の夜を讀書しませう。もういろ／＼の本を山のや



うに積んでね、——さうすれば新しい珍らしい世界が私達の前に開けてくるでせう、母様本當に歸つて来て下さいよ」

龍子夫人「歸らなくつてさ天使さん！」

魯馬吉入り来る。岩野小聲に歌をうたふ。

嘉平治「岩野がのんき相に歌つてる」

岩野（ボロボロの赤ん坊を襤褸にくるんだ形をしたのをとり上げて）「坊やいゝ子だ、寝んねしな。……（赤ん坊の泣き聲ふきや〜）おゝよしよし、ねんねんよう（ふきやあ、ふきやあ）可哀さうに〜（包を床の上に抛り出して）どうぞ、私のために新しい仕事を見つけて下さい、でないとどうにもなりません」

魯馬吉「岩野、口を見つけてやるから安心しな」

岩野「町では何處へ行つても暮らせませんもの、仕方ないから行くのよ、（歌の節を

口吟む）どうでもなれさ」

比須吉入り来る。

比須吉（息をはづませ）「ふう、ふう、どうか息を入れさせて下さい。わしは苦るしくつて〜、皆さん済みません、水を一杯！」

嘉平治「また錢を貸せだらふ。いや閉口〜わしは逃げ出した（出て行く）」

比須吉「どうも奥様、とんだ御無沙汰をいたしましたな（魯馬吉に）あんたもここかな宜い工合だ、あなたに逢うことが出来てさ。時に君は實に物凄い才物だ。さあこれをどつてくれ給へ（魯馬吉に金を渡す）四百圓、まだ八百四十圓借がある」

魯馬吉（呆氣にとられ）「どうも夢のやうだ、どこから差引出して來たい」

比須吉「一寸待つて下さい、どうも熱くつて……いやはや驚いたことだ、何處かのイギリス人がやつて來てな、私の所有地の内に一種の白粘土を見つけたと云ふのだ（夫人に）奥様。これは貴方の分でございます、ゑゝ四百圓、残りはこの次に……（水を飲んで）たつた今しがた汽車の中でね、ごこかの——大哲學者が云つてくれましたよ、——吾々は皆な屋根から飛び下りりやあ宜いんだつてね……その人曰はく、飛び下りろ、さうすれば總ての許がつくんだつて……どうぞ水をも一杯……」



魯馬吉「その英吉利人と云ふのは一体何んだね」

比須吉「俺はその白粘土の土地を二十四年間貸したんです、だが今はゆつくりしては居られません、私は方々に借金がありますんで、その方を廻らんければなりません、又木曜日にはおうかがひ申します」

龍子夫人「私共はこれから町へ引移ります。そして私丈けは明日外國へ立ちますよ」

比須吉「へえ、(驚愕して)何んですつて町へお出でなさる——おや道具も何も——旅行鞆があつて、成程本當だ、(泣いて)本當だ。成程素張らしい智慧のある連中だよ、あの英吉利人は本當だ。ぢや御機嫌よう、皆様無事にお暮らしなされ——成程なこの世の中のものは何もかも片が附いて行くのだな、(夫人の手に接吻して)もしいつか、この私も片が附がついたと云ふ知らせが行きましたら、どうかこの爺の——馬のことを思ひ出してやつて下さい、「昔、比須吉と云ふ妙な男があつた天國に安息あれ」こうお言葉を手向けてやつて下さい——(深く感動した様子で出

て行く、不圖戻つて)家のだい子からも宜しく申しました(出て行く)

龍子夫人「さあ、これで出掛けられる。たゞ氣になることは房兵衛爺のことだが、

(時計を出して見て)まだ五分居られる」

愛子「母様。房兵衛はもう病院へやりましたわ。彌吉が今朝さう云つてやつたさうですよ」

龍子夫人「それから一つ心配なのは輪喜子だよ、あの子は毎朝早くから起きて働きつけて居たのだから、それが爲る事が無いとなると、もう水に離れたお魚のやうなものだらふじやないか。あの子は瘦せて色が悪くなつて、泣いて許り居るから可愛想に……(間)ねえ魯馬吉さん、私、始終さう思つてゐるんだけど——あの人を貴方に娶つて貰ひ度いだけれど、……見た所あんだつて奥様をさがしておいでなのやうですしね、(愛子にさゝやく、愛子、岩野に臆で示して出て行く)あの子も貴方を愛してゐるし、貴方もあの娘が好きなんだから、どうして二人で差かみ合つて居るんだか、私にはどうしても分らないの、私、どうしても分らない



のよ」

魯馬吉「實の事を云へば私にも分らないんです。どうもそれが變なんです、まだ時間がありますのなら、ここで直ぐ極めて仕舞ひませう。どうか片を付けてしまひませう。もし貴女が居なくてもなりや、私は一生あの人に結婚の申し込みなどを爲すにしまふでせう」

龍子夫人「さうよ、とにかくそんなに手間にとれることでも無いのだから、あの娘をここへ呼びませう」

魯馬吉「それにシャンパンの用意も出来て居る。(壺を見て)ヤツ空だ、誰か飲んでしまつた(彌吉咳拂ひする)オヤオヤ、皆ななめてしまつたのだ」

龍子夫人(快活に)「さあ素敵よ、私達は皆な退いてませう。アレー(行け)彌吉。私、あの人を呼びますから、(扉口で)輪喜子、そこはもうそれ丈けにして被入い、すぐ！」

夫人と彌吉出で行く。

魯馬吉(時計を見て)「さうだ」

間。後で押し殺ろす様な笑聲。囁き。やうやく輪喜子出で来る。

輪喜子(着物をしらべて)「不思議だねえ、どこにも見えないよ」

魯馬吉「何を探して居るの」

輪喜子「私自分で包んだくせに、どうしても思ひ出せないのよ(間)」

魯馬吉「今日はどこへ行くつもりです、輪喜子、ごちらまで」

輪喜子「私、私、小栗家へまわりますわ、私をここで家政やら何やらを致します」

魯馬吉「オヤオヤ、ヤーシユネウポーへね、五十哩もあるぢやありませんか、(間)ぢ

やあまわ、愈々此方の生活も終りになつたわけだね」

輪喜子(着物をしらべて)「何處へやつたらふ、私、キットトランクの中へ入れたのよ……もう此方の生活もおしまひですわ、何にもなくて……」

魯馬吉「私は直ぐハルコフへ立ちますよ——同じ汽車でな。どうも仕事が重なつてゐるので、後へは海老平を残して置きます。あの男を雇うことにしました」



輪喜子「はあ」

聲（外の方で）「魯馬吉さん」

魯馬吉「あ、直ぐ行きます。（急いで引き込んで行く）

輪喜子床の上にベタリ座はり、包みに頭を埋めて忍び音になく、扉があいて夫人忍つと入り来る。

龍子夫人「どうして。——もう行かなければならぬ」

輪喜子（泣き止んだ目を拭き乍）「え、さうですわ、母様、汽車が間に會へば私、今日

真直に小栗家へまわります」

龍子夫人「愛子、支度をなさい」

愛子入り来る、後から嘉平治、岩野ついてくる。下男、馭者入り来る、海老平は荷物の中でマゴ／＼して居る。

龍子夫人「さあ、それで出掛けられますよ」

愛子（嬉し相に）「いよく旅立よ」

嘉平治「諸君！ わが敬愛する諸君！ 私達は今やこの家を永久に去るに臨み、一言の言葉無しには居られませぬ、私はこの瞬間に於いて、私の胸中にあふるゝ感慨を一言述べること止めたい」

愛子（頼む様に）「おち様よう」

輪喜子「お止し遊ばせ」

嘉平治「真中の穴に赤玉が二度だ、ヨシ／＼もう黙りませう」

文雄、后から魯馬吉出で来る。

文雄「さあ、もう時間です！」

魯馬吉「海老平私の外套は」

龍子夫人「私、もう一分間、こうして居るの。そしてこの家の壁や天井を私、しみじみしたなつかしさで見ているの」

嘉平治「思ひ出すよ、私が六歳の時、この窓の所に居ると死んだお父さんがお寺へ行く後ろ姿が見えたつけ」



龍子夫人「何もかも皆な運びましたか」

魯馬吉「さうのやうです。(外套を着乍海老平に)皆悉皆よいか、よく氣を着けてな」

海老平「大丈夫です！」

龍子夫人「さあ行きませう。もう誰も残つては居まいね」

魯馬吉「春迄はね」

輪喜子、包の中から傘をぬき出して勢よく振りまはし打ちかゝるやうにする、魯馬吉故意ミビツクリした風をする。

輪喜子「こんなに驚きなさなくなつてもいゝわ、私、そんな積りではなかつたのですから」

文雄「さあ出掛る時間です。汽車はもう直きに着くでせう」

輪喜子「土井、あんたのオーバシューズね、旅行靴のわきにありましたよ(泣聲で)何んて汚ならしい靴なんでせうね」

文雄(オーバシューズを穿いて)「さあ行きませう」

嘉平治(泣くを憚つて感動しながら)「汽車だ——停車場だ——真中で赤か二度かい」

龍子夫人「さあ」

魯馬吉「皆な居りますか、誰も残つちやありませんか(扉に錠をおろす)いろく品物が置いてあるから錠をかけて置かんければね。サア行かう」

愛子「左様なら古い家！ 左様なら舊い生活！」

文雄「新生活の門出を祝福します」

愛子と一緒に出て行く。輪喜子部屋を見まはしソロソロ出て行く。彌吉岩野犬をつれて出て行く。

魯馬吉「では春までね。サア行きませう、皆さん！」

龍子夫人、嘉平治残る、二人はそれを待つてゐたやうに見える、お互に頸に手をかけ合つて人に聞かれるを憚るやうに聲をおさへ泣く。

嘉平治(絶望して)「妹。妹」

龍子夫人「あゝ、なつかしい私の園！ 可哀い綺麗な櫻畑！ 私の生命！ 私の青春！



私の幸福！ 永久におわかれよ

愛子（外で快活に）「母様」

文雄「お——い」

龍子夫人「も一度お名残に窓と壁とにお名残を惜しませう。亡くなつた母様はこの部屋を行つたり來たりしたね」

嘉平治「お、妹。妹」

愛子「母様！」

文雄「お——い」

龍子夫人「今行きます」

出て行。舞台空虚。馬車靜に軌り出づ。沈黙の中に木を伐る憂々の音悲しく寂しく響く。病氣の房兵衛扉にあらはる。

房兵衛（錠をしらべ）「皆な行つて仕舞つたのだな。おらを忘れて行つたのだな。（溜息つき）俺の顔見なかつたのだな。——若木の森！ 緑の森！（分らぬことを囁く）

一生がまるでそんなものゝ様に過ぎて仕舞うた。（横になり乍）おら横にならふ。もうおらには何の力も無い、何にもねえ。いやとつこい……でき損ひ奴」（寝たまゝ動かない。）

遠い、空の上から、絃の斷れるやうな音が憂はしげに消えて行く。沈黙がつゞく。遠く櫻の畑の中で憂々と木を伐り倒す音がひゞく。

—— 葦 ——



大正十四年十二月二十五日印刷  
大正十五年一月五日發行

定價六十錢  
送料六錢

高山豊花譯

發行者兼

東京市淺草區瓦町十番地  
榎本松之助

印刷者

東京市淺草區瓦町十番地  
鳴田良治

發行所

東京市淺草區瓦町十番地  
榎本書店

大阪市南區松屋町三九番地

榎本書店

振替大阪三四八二番 電話東二六二四番  
東京市淺草區瓦町十番地 二七九五番

振替東京七二七九三番  
電話淺草四七一七番

### 發行所



メロサ

メソロスベル  
高山豊花 原作  
譯

### 妖婦カルメン

四六形二〇〇頁  
定價六拾錢

ゾエミール  
棚田紫郎 原作  
譯

### 女優ナ、

四六形二〇〇頁  
定價六拾錢

アレキサンドル  
高山ユリ 原作  
譯

### 戀の椿姫

四六形二四〇頁  
定價六拾錢

カヒヤリスン  
小野秀雄 原作  
譯

### 思ひ切つた告白

四六形二七〇頁  
定價六拾錢



原バ  
一  
田シ  
フチ  
譲原  
譯作

サ  
ア  
ニ  
ン

四六形二三〇頁  
定價六拾錢

原ゾ  
エ  
田ミ  
ラル  
譲原  
譯作

ベ  
ラ  
ミ  
ー

四六形二三〇頁  
定價六拾錢

高フ  
山イ  
豊ル  
ド  
花原  
譯作

サ  
ロ  
メ

四六形二〇〇頁  
定價六拾錢

原ゾ  
エ  
田ミ  
ラル  
譲原  
譯作

さ  
か  
ば

四六形二〇〇頁  
定價六拾錢



終

